



安心院と書いて
あじむ と読む
ふるさとの少し謎めいた呼び名
流行のパワースポットもあちこちに隠されている
松本清張はこの盆地に古代人の気配を感じて
戦前から幾度もここを訪れた

A wide, dark river flows through a misty landscape. Large, leafy trees stand on both banks, their branches hanging over the water. The scene is shrouded in a thick, pale mist that hangs low over the surface of the river.

「そうです。あなたは現在のアジムをアヅミの転訛だと思いませんか？」

松本清張は『陸行水行』の中で浜中浩三にこう言わせてています。

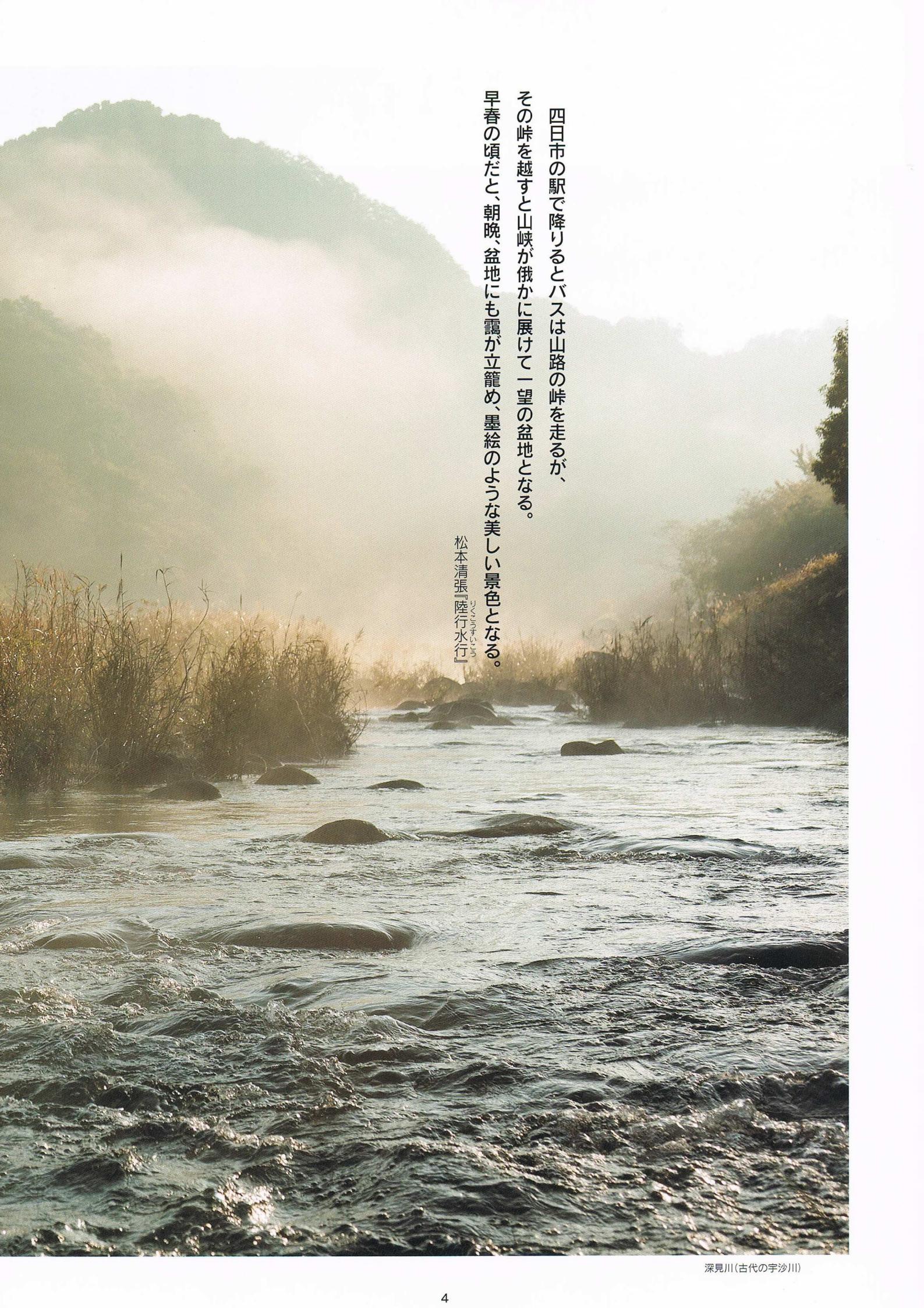
古代の安心院は、渡来人の阿曇族アツミが住んだ国だった。

そのアヅミには渡来人の言葉も文化も伝えられていた。

だから魏志倭人伝きしわじんでんの一行が邪馬台国をめざして旅する途中、言葉の通じるこの国に立ち寄ったのだと浜中は言うのです。

註【魏志倭人伝】

「魏志」は中国の三国時代の魏(220~265)の正史。その中の「東夷伝倭人の條」は3世紀頃の日本を知る貴重な資料となつてゐる。日本では一般的にこれを「魏志倭人伝」と呼ぶ。

A photograph of a river flowing through a valley. The water is turbulent with white foam. On either side of the river, there are dense clusters of tall, dry grasses. In the background, large, misty mountains are visible under a hazy sky.

四日市の駅で降りるとバスは山路の峠を走るが、
その峠を越すと山峡が俄かに展けて一望の盆地となる。

早春の頃だと、朝晩、盆地にも靄が立籠め、墨絵のような美しい景色となる。

松本清張『陸行水行』
[「



妻垣神社の不思議な神威

妻垣神社の記録や付近の人たちの言い伝えには、妻垣神社で示された不思議な神威の話がたくさん残されています。

夜中に響く太鼓の音

妻垣神社の近くに住む矢野鶴子さんの話

今から四十年ほど前のことです。昭和45年の春頃から神社の改修がはじまつたんですが、ある日の夜、十二時を過ぎた頃に神社の境内から太鼓の音がドーン…ドーンと間をあけて響くのが聞こえてきました。その日は、ああ、だれか病気が治つたお礼とかで夜中に参つているのだろうと思つていましたが、また数日すると夜中にドーン…ドーン…と太鼓が響きます。それが何日も続くので一体だれが叩いているのだろうか?と不思議に思い、近所でも噂をしていました。近所に妻垣神社の欄宣をしていた藤井武光さんが住んでいて、藤井さんもその頃は若かつたから夜中に起き出して太鼓の音を確かめに行つたそうです。真っ暗な中を南門の前まで進み、下から拝殿を仰いで見ると薄明かりがついていて、太鼓の音はするけれど人影はなかつた。そーつと階段を上がつて拝殿に忍び寄つたら、突然ふつと薄明かりが消え、太鼓の音が止んで、辺りはザワザワッと草木が揺れる音だけになつた、と。薄明かりも太鼓もこの世のものではないという感じで、藤井さんはあまりの驚きに腰を抜かし、家まで這つて帰つたそうです。

その後も太鼓の音は毎晩ではないけれど、思い出したよううに真夜中に響き、ちょうど翌年の3月にあつた行幸会の頃まで、一年以上続きました。

つまがきへ行け!

昭和46年3月、宇佐神宮の略式行幸会がなんと355年ぶりに執り行われました。行幸会では八幡神が八つの神社を巡回されます。その七番めになる妻垣神社はちょうど社殿創建1200年の年にあたるので、行幸会にあわせて前年の3月から10月にかけて社殿の大改修を行いました。すると改修がはじまつた頃から夜中にドーン…ドーンとゆつ

くり一定の間隔で叩く神事の太鼓が聞こえはじめたのです。その音は行幸会の前日まで続きました。行幸会と竣工式がともに行われたのが昭和46年3月27日と28日の二日間でした。

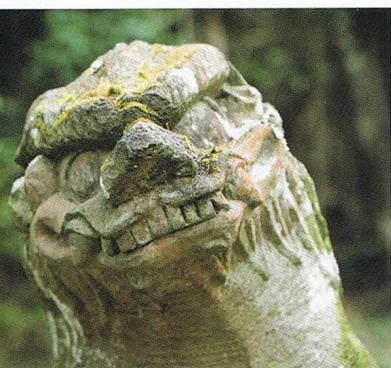
お祭りがすんだ翌29日の朝8時半頃、藤井欄宣と衛藤総代たちが後片づけのため神社に行くと、拝殿で年配の男性が一心にお参りし、もう一人の若い男性は境内を掃除しているところでした。年配の男性は立っているのがやつとていう疲れた様子でしたから、欄宣さんが声をかけると「実はここ何日間か寝ていないので」という話です。年配の男性は広島県呉市の鉄工所の社長で、一緒にきているのは秘書といふことでした。「寝ようとする、見たこともない、知らない神社があらわれて、つまがきへ行け、つまがきへ行け」という声がします。そして今、つまがきの神の御扉が開かれている、と言うのです。毎晩それが続いて眠れないので、このままだと体がおかしくなると思い、あちこち手を尽くして探しました。それでようやく昨日、つまがきとはこの妻垣神社のことだとわかり訪ねてきた次第です。」

藤井欄宣が「実は昨日まで大きなお祭りがあり、夜になると太鼓の音が聞こえるなど不思議なことが起こつていました、あなたが体験されたことも妻垣の神さまのご神威なのではないでしょうか」と話すと、その社長は大変感激し、「10月23日のお祭りの日にもう一度お参りいたします」と言つて帰路についたそうです。社長は約束通り秋の大祭にお参りもし、後日、会社が発展はじめたなどが書かれた丁寧なお札の手紙が神社に届けられています。

帰ってきた釣鐘

太平洋戦争がはじまるごとに、日本は鉄鋼材が不足して武器もつくれない状態になり、全国民に金属の提出をもとめました。マンホールのふた、鉄の扉、銅像、家庭では台所の鉄びんから、お寺の釣鐘までみな運んで溶かして使うことになつたのです。妻垣神社の境内にあつた神宮寺の釣鐘も運ばれ、八幡製鉄所の溶鉱炉の前で溶かされる順番を待つていました。ところが、溶鉱炉の担当者はたくさんの釣鐘の中から妻垣神社の釣鐘だけを別にしておいたのです。その理由は「形がいいから自分のふるさとにしておいたのです。その理由にしよう」と考えたからでした。順番がきても後へ後へと回して、戦争が終わると本当にその人はふるさとの熊本県山鹿市の長隆寺にその鐘を送りました。

それから65年がたち、平成21になつて釣鐘は妻垣神社に里帰りしてきたのです。釣鐘に刻まれていた『豊後国宇佐郡安心院 妻垣八幡宮』の文字によつて連絡がついたのでした。釣鐘がつくれたのは江戸時代の承応2年、四代将軍家綱の時代という由緒あるものでした。戦争中に供出された釣鐘が帰つてきたというのも滅多にない慶事、これも妻垣の神さまのご神威だろうと宮司も氏子もみんなで喜びあいました。



龍王山 海神社の狛犬

足一騰宮の夢

あしひとつあがりのみや
昭和49年2月、北九州市戸畠区在住の矢野良宗氏が足一騰宮の夢を見たといつて神社に参拝。安心中院町役場で矢野武夫町長と会談しました。矢野良宗氏が金五万円を寄進し

たことによつて足一騰宮の玉垣が復元されました。